



① アマンソウ

大度集落から北東側。国道331号、大度交差点東側の丘陵上にあるガマ（洞穴）で、1945年3月23日の空襲の際には多くの大度住民がこのガマに避難。

翌24日、艦砲射撃が始まると住民は再びこのガマに避難したが、日本軍は住民に対して、ガマを出て山原に避難するように命じた。住民の一部は山原に疎開、また一部は近隣集落のガマや岩陰などに避難した。逃げ場を失った人々がアマンソウに戻ると、中には少人数の日本兵しかおらず、人々はこのガマに入ることができたが、撤退してきた日本兵に再び壕を追い出されたという。

沖縄戦中にアマンソウに避難した大度住民は100人以上になるが、ここで捕虜になったという者は1人である。

② 疎開指定地

恩納村名嘉真

摩文仁村民の疎開指定地は恩納村名嘉真であった。役場からの勧めに応じて最初に疎開した人々は、トラックで名嘉真に向かった。艦砲射撃が始まった後にも、人々は馬車や徒歩で名嘉真に向かっている。摩文仁村出身者の山原疎開者は190人で、うち66人が大度出身者であった。



『真壁小学校創立百周年の歩み』より

③ 南部区

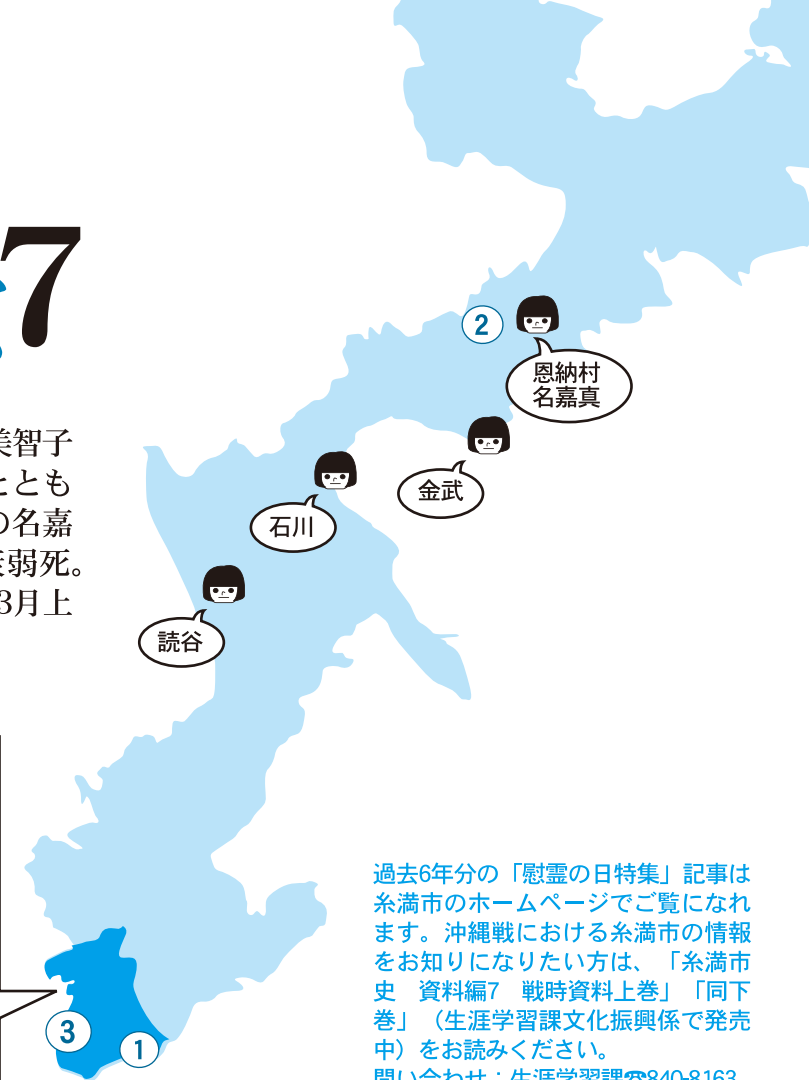
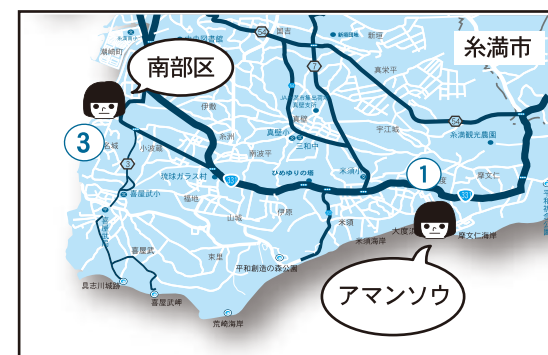
1945年11月、各地の収容所にいた高嶺・真壁・喜屋武・摩文仁村民の移動先として、名城海岸の兼久原にあった米軍兵舎跡に南部区が設置された。上原さんの証言にある名城の浜とはこの南部区のこと、海岸にはコンセットを利用した南部区役場のほか、名城診療所、南部初等学校などが設置された。

真壁・喜屋武・摩文仁村の合併はこの南部区で協議され、1946年4月に三和村が誕生した。

6月23日 慰霊の日 特集

戦跡を歩く7

沖縄戦当時、小学校3年生だった上原美智子さんは、米軍上陸直前に家族や親せきとともに徒歩で恩納村名嘉真に疎開。避難先の名嘉真の山中で乳飲み子だった末の弟は衰弱死。防衛召集された父親は、1945(昭和20)年3月上旬以降の消息が不明のままである。



過去6年分の「慰霊の日特集」記事は糸満市のホームページでご覧になれます。沖縄戦における糸満市の情報をお知りになりたい方は、「糸満市史 資料編7 戦時資料上巻」「同下巻」（生涯学習課文化振興係で発売中）をお読みください。
問い合わせ：生涯学習課 ☎840-8163

少女の見た沖縄戦 上原美智子さんの体験談

○昭和20年3月23日

朝方、米軍機が東の空から爆音とともに、急降下と旋回を繰り返して何度も攻撃してきた。母と姉は家畜の世話ですぐには避難できず、私が八カ月の弟を背負い、三歳の弟と六歳の妹を連れてムラの東側のアマンソウという壕へ向かった。

すでに中はムラ人で溢れていて、座る場所を探していると末弟が泣き出した。暗闇の中から「マーヌクワガ、ナカサンケー（どこの子か。泣かすな）」、「ンジテイケー（出ていけ）」と聞こえた。暗闇におびえて三歳の弟も泣き出した。泣き声が漏れないように末弟の口を手のひらで覆うと次第に声が小さくなった。苦悶の表情の末弟を見て耐え切れずに壕から出て、松の木の下に妹弟たちと震えながら隠れた。母と姉が息も絶え絶えにようやく私たちの元に來た。思わず母に当り散らすと、何も言わずに泣いていた。

○山原への疎開

その夜、私の家族は親せきとともに山原の恩納村名嘉真に向かった。母は末弟を背負い、頭には大きな風呂敷包み、私はランドセルを背負い、通帳など貴重品入りの非常袋を肩に提げていた。

○山原での避難生活

闇夜を歩いて恩納村名嘉真に着し、先に避難した大度の人たちと再会した。私たちが迎えるための炊き出しが用意されていて、大根と芋の入った豚汁にありつけた。最高の思い出であり、一生心に残る味であった。山中にはかやぶきの掘っ立て小屋があり、昼は山奥の防空壕に逃げ、夜は小屋で生活した。

避難民の多くは女性と子どもたちであった。女たちは敵に見つかり乱暴されることを恐れてわざと汚い格好をして身を潜めていた。昼、攻撃の合間に子どもたちが薪を拾い、人のいない民家から食料を取ってきて調理をしていた。母

一晩中歩いて、読谷村大湾辺りで夜が明けた。親切な老人に案内された壕近くには炊事場や水があり、最後の米で家族のにぎり飯を作った。

夜、再び山原へ向けて出発すると周りは避難民で溢れていた。にぎり飯の入ったカゴを持ち息も絶え絶え歩いていると、見知らぬ女の人が「持つてあげよう」とカゴを持つてくれた。ところが、人ごみの中でこの人を見失い、家族の二食分の食料が消えてしまった。

金武辺りで夜明けが近付き再び身を隠した。その日の食事は砂糖と切干大根でしのいだ、ひもじさと申し訳なさで家族の顔を正視することができなかった。

上原 美智子さん

昭和10年、旧摩文仁村字小渡（現大度）生まれ、那覇市在住。小学校3年生で沖縄戦を体験。元公立中学校教頭。現在は沖縄県平和祈念資料館友の会副会長を務めている。上原さんは戦後長く沖縄戦の体験を語ることはなかったが、沖縄戦の体験を風化させてはならないとの思いから、現在では県内各地の学校で平和の大切さ、戦争の悲惨さを子どもたちに語っている。

